

海光

句集

百瀬七生子

あとがき

冬



147

秋



103

夏



55

春



10

目次

海 光

句集

海光

春

どの家も梅が咲きをり子が増ゆる

紅梅を見むための藪ひらきけり

榧の木に春の地熱の上りをり

被せたる板戸ひと揺れ春焚火

た
め
ら
ひ
の
斧
の
傷
あ
る
春
の
杉

晒
さ
れ
て
春
色
出
で
し
蔓
細
工

薄氷の水に戻りし鬼やらひ

神が名をつけたるは夜春岬

汀
ま
だ
知
ら
ざ
る
魚
や
春
な
ら
ひ

石
投
げ
て
春
の
海
鼠
に
あ
た
り
け
り

小袖ほどの若布寄り来る和賀江島

降りるにも乗るにも弾み若布舟

頼りなく櫂のおかるる若布舟

若布舟はじめの転を波に置き

負けてゐし波に乗りけり若布刈舟

乾きつつ古びてをりぬ若布舟

海苔粗朶を通りし波に力出る

さざなみを離れて沈む春の鯉

きのふから鶯のゐる獅子ヶ谷

春の噴水見えざる玉をあげてゐし

人間が好きな白鳥残りを作り

啓蟄や石を抱きては積む男

涅槃図を大きく回し担ぎゆく

涅槃図を包みし布といふを見る

梅の紅つばきの紅や鎌倉に

落椿祠の神も外歩き

初
わ
ら
び
東
下
り
に
坂
い
く
つ

大
寺
に
下
り
て
し
ま
ひ
ぬ
蕨
狩

蕨折り飢ゑをさまらぬ日なりけり

ぜんまいの筵並べて峠番

流れ来て干潟にのりし椿かな

霞こそ伊豆とや魚籃観世音

あたたかや魚の腹から小魚出て

大鯉の背に一枚の春の水

屏風絵の金ともちがふ花ミモザ

蔵の扉を霞へ開く重さかな

衛士ひとり霞の番をしてみたり

鳥曇毀ちて高き舟の嵩

貝殻の波にあたらし立子の忌

雛納め戸口に魚の配らるる

埴輪見てきて鉄棒のあたたかし

山やまに呱呱の声ありあたたかし

内股のぬくしと松をのぼる子ら

たんぽぽも墓石も殖ゆるばかりにて

種芋の袋の網目ひろがれり

ぐんぐんと地熱のあがる苗障子

囀
り
の
こ
こ
ら
辺
り
に
わ
が
墓
標

松
の
木
に
別
の
囀
り
あ
り
に
け
り

城山に桜咲き出し物理室

病み下手の泣いて笑つて桜二分

一
の
枝
二
の
枝
と
咲
き
夕
桜

桜
か
ら
退
る
家
々
平
泉

洞
ながく
兎抱か
るる山
桜

水
底の魚
にとほ
るや花
の雨

花の谷花の堤や水を引く

上水のぐいと曲がりぬ朝桜

い
く
ら
で
も
坐
れ
て
し
ま
ふ
花
筵

風
垣
の
す
と
ん
と
切
れ
る
花
吹
雪

水ありて桜のありて会津晴

花の中念仏踊りの跳びもして

干肉をナイフで削いで桜狩

けものらの速歩はじまる夕桜

頭から被せるシャツや磯遊び

浅蜷掘るころ砂紋にはじまれり

さざえ海女のとなり
に洗ふ手足かな

何もかも袋に入れ
る磯遊び

引潮を待つて杭打つ朧かな

鴨の海春月に色出で来たり

うまき茶をいれてくれたる海市番

石鯛に春菜をどかと返されし

いつまでも均してゐたり鹿尾菜干

流れつくものに寄りたる春日傘

海光や鷺の巣蕊を広げたり

鳶の巣をはみ出しものなびきをり

声にして嬰の名よろし桃の花

大勢の気配ある家桃の花

紫木蓮門のあるべきやうにかな

鈴懸の花や門扉に十字架を

虚子の忌のもろもろの芽をてんぷらに

鎌二丁刃を重ね持つ穀雨かな

あをあをとおのが丈あり松の芯

藤の花大きく橋の架かりをり

豆の花電車の中をよく見えて

大黒柱恵比須柱や蜂を飼ふ

ドロップの缶の蓋しめ牛蛙

神々に妻ありあらせいとうの花

苗運び風を運んでをりにけり

風連れてどこまで歩く春日や

夏

波間より湧き出る鷗子供の日

校庭に大波上る端午かな

吊橋に一湾を吊る薄暑かな

竹植うる日や朝刊を庭で読み

緑
さ
す
ギ
タ
ー
ケ
ー
ス
を
水
平
に

手
の
上
で
大
輪
と
な
る
牡
丹
片

祝ぎごとの縫ふもの多し夏めける

見たきものに多佳子の着物鉄線花

心よわき日やあをあをと露を煮て

袋掛夕日に角のありにけり

まんぼうを昼に食ひたり更衣

長生きをせむと生まれて更衣

仏にも木の香のむかし朴の花

鎌倉の件の芭蕉玉巻けり

宵宮へ舟で着きたる子どもかな

纜をからだで手繰る祭舟

流
れ
つ
く
木
の
根
草
の
根
汐
祭

蛸
の
上
に
置
か
れ
し
蛸
の
す
べ
り
落
つ

夏の雲沼を溢れて広がれり

雨粒のやうな梅の実生まれけり

折り返すさきざきのこと桜の実

腰越に使ひ歩きや濃あぢさゐ

神座に竹皮を脱ぐ光かな

さざなみのまだまだ入る青葦原

木の髓のくれなゐ著し走り梅雨

烈風に曲りし畝や茄子の花

落ちる時飛ぶ真似したり鴉の子

行きすぎし舟を戻しぬ鳩浮巢

たてよこ厚さ浮巢をこころ積りせむ

櫓を入るる水に手ごたへ青真菰

どの葎も大葎切を待ちゐたり

藪蚊出づ心中といふまぶしさに

磨崖佛よりめまとひの移り来し

頂上の茂り明るし祇園山

湯島聖堂

魯の国の大緑陰に似て非なり

つぎつぎと緑陰の子の入れ替はる

緑陰をはみ出てゐたり画学生

大いなる緑陰にして投込寺

神輿蔵玻璃いつぱいの木下闇

大南風世田谷に馬首たてなほす

川
照
り
へ
簾
か
け
た
る
能
面
師

木
々
の
根
の
み
な
届
か
ざ
り
蟻
地
獄

夏潮の端へ端へと稚魚の群

引く潮に魚のかたまる暑さかな

どしやぶりの
関東に入る
甜瓜

おつかひの
帰りは走り
月見草

鎌倉に垣根いろいろ百日紅

夏行僧水辺を歩くごと来たる

裏山へ開いてゐたり安居寺

坊の戸を猫にあけをく安居かな

腹の空くことも仏恩風涼し

足音も南無阿弥陀仏雲の峰

妙法の大き麓と青嶺かな

起きぬけの背骨のかたき土用入

若者のくねくねとある夾竹桃

雨の鬱日の鬱楸の青実かな

海開き大穴掘つてはじまりぬ

四万六千日蠟燭の炎に力

群
る
る
と
き
金
魚
の
鰭
の
よ
く
動
く

天
水
の
金
魚
は
羽
化
を
待
ち
み
た
り

水面にぶらさがり
みる金魚かな

一宿に一川渡る
白雨かな

炎天へ船の中より傘さして

放られし穴子の頭はねあがる

蛸釣つて礁に昼寝してゐたり

釣り糸を闇へ投げては穴子釣

釣りし魚炎天を打つ響きあり

草ふぐを水槽に飼ひ昼寝せる

舟の帆を広げて洗ふ大西日

夏潮の清めし櫓・櫂・和賀江島

淡海を珠と
いだきて
昼寝せり

あめんぼの
甘き香や
わが誕生日

風鈴や平成の子に乳足らぬ

縄文の夏炉かしこみるたりけり

奪衣婆のかかへし衣の汗まみれ

隠沼の上に町あり雲の峰

ひとつづつ顔のありたる日傘かな

雲の峰鳥の羽根を落としけり

空
蟬
が
薄
荷
の
花
に
ゐ
て
匂
ふ

番
付
の
煽
ら
れ
て
を
り
羽
抜
鳥

涼しさや池に入りたる大樹の根

舞扇広げるやうに水を打つ

猫
百
熊
打
水
の
先
広
が
れ
る

か
ら
む
し
刈
る
午
報
一
山
一
谷
に

思ふほど泣かぬ天牛飛ばしけり

龍之介忌の山門に海の砂

風に浮くものを並べて海の家

天上は歩けぬ国や蠅取草

面
つ
け
て
た
ま
し
ひ
入
る
夏
神
樂

母
老
い
て
蛹
に
な
ら
む
夏
の
果

秋

海からの風のうれしき魂祭

入口で軽くつまづく施餓鬼寺

鎌倉の盆道虚子の墓で尽く

盆道に何の白線引きあるや

水施 餓鬼供物を水の押し返す

帰りには見えたるものや水施 餓鬼

施 餓 鬼 棚 解 く 青 竹 の 空 を 切 る

解 夏 の 僧 巨 福 呂 坂 を 連 れ だ ち て

浜施餓鬼鴉について歩きけり

引き汐の浜ひろびろと魂送り

初秋の僧の草履を借りて出る

手から入る郡上踊りや灯をおごり

朝
々
に
老
人
の
ゐ
る
芭
蕉
か
な

川
の
上
に
通
せ
る
川
や
秋
茜

秋
汐を高く跳びけり
穴子釣

上潮に翅をぬらせり
赤とんぼ

海
際
に
秋
暑
だ
ま
り
の
あ
り
に
け
り

月
の
海
よ
り
揚
が
り
た
る
魚
ぬ
く
し

月食の海泳ぎきてて鰭のある

錨百海にしづもる月夜かな

初潮の力出で来し波がしら

酔客の門を出づれば月の人

寝支度の母がうしろに望の月

長き夜や機織らぬ世を遊びゐて

十王に囲まれてゐる秋団扇

美術展出て水に沿ふ城の町

かまつかや髪束ねあふ少女たち

桔梗の日向から入る具足の間

釣舟草もまれて水の新しき

桔梗や声におとすとおさへると

子の家に長居してをり茸飯

銀しろがねの
日をぬりこめし干し
鯛

尾花蛸夢の途中の腸抜かれ

汐けむりふりかぶりぬる秋日傘

薄
は
風
の
帆
柱
は
波
の
揺
れ

海
原
の
闇
見
え
て
き
し
鉦
叩

転入れて舟を引き出す秋の波

貝殻に海星に秋のほてりかな

秋光の
転ばらばらに
遊びをり

一本づつ
桔梗の
雨や
海蔵寺

雨雲は箱根の東男郎花

雨の音霧の容や箱根にみ

真中へふくらんでゆく花野かな

九・一歩くたび汗新しく

ひとあばれして運ばるる秋の鯉

大花野咳を忘れし人とゐる

急流のいきなり湖に葛の花

からあるの花のちひさき湖の国

最澄の山虫よけに薄荷の香

どくだみを食つたる虫を探しをり

鶏頭を抱けば茎の軽きこと

ぼた餅に角のごときがつづれさせ

をとこへし影の中から立ち上がる

手を打つて謡ひつなぐや男郎花

かまつかや踊念仏の真中にゐ

尾花より離れし風のもう見えぬ

灯の裏の伝ひ歩きや風の盆

木の股にこどもの消えし秋の空

穴惑ひ急ぐところを見られたる

穴惑貝殻坂にかかりけり

蟬
穴の
ひとつ
ひとつ
に
秋の
鐘

気
の
利
か
ぬ
ふ
り
し
て
を
る
や
茸
飯

桜苗の紅葉はじまる農学部

冬瓜の中よりこども抱きあげし

うめもどき日に日に雲の新しく

わが身より跳びたるごとき蟻蚶かな

風やめばそこに落ちけり蘆の絮

亀ヶ谷より吹き上がる草の絮

谷戸谷戸に秋風
の行く道あり

黄落や閻魔堂
より笑ふこゑ

銀杏散る途中掃かれてありしかな

秋風の門がいくつも山城に

秋風にゆるゆる剥がれ棕櫚の皮

新藁を積み海近し山近し

海草を鋤きこんでをり天高し

がらがらと錨が海へ十三夜

船端をのぼる海藻十三夜

近く来て色見せにけり渡り鴨

秋風に白蘇るヨットの帆

色鳥のごとき小舟や文化の日

山
彦
は
山
に
残
り
ぬ
秋
の
暮

冬

小春日の波すれすれに来る子ども

冬ぬくし雀と同じもの食べて

真中より揺るる運河や冬に入る

懸大根三浦の浜の立ちあがる

石
菫
の
花
金
剛
力
の
明
る
さ
よ

冬
晴
れ
や
人
声
ひ
と
を
離
れ
来
る

肩力む子の早足の落葉道

朴落葉重ねて持てば振り返る

空
き
腹
や
八
ッ
手
の
花
を
通
り
す
ぎ

翩
翻
と
衣
張
山
の
冬
日
か
な

谷戸谷戸の時雨にいろのありにけり

走りたき馬を走らす冬紅葉

小春日の止まらんとして走る馬

力入れ犬を放てる冬の浜

風垣や村の家々鯖を酢に

風垣を濡らして通る雨合羽

冬の雨海鼠眠らせ貝眠らせ

鵜も人も斜めに立てり冬の海

北国の綿虫日和といふはこれ

冬鳥の群入れ替はる手取川

石山の石かわれかと時雨けり

切通し冬の泉の溢れたる

谷^{やつ}
谷^{やつ}
に
梵
鐘
を
見
る
霜
柱

人
の
訃
の
寒
き
日
暮
を
味
噌
買
ひ
に

焚火見て川の合はさる明るさに

白菜や日暮の顔のいろいろに

義士の日のつき来し猫を帰しけり

佐助稲荷冬の泉の底洗ふ

眠
る
た
め
髪
梳
い
て
を
り
冬
籠

蕪
提
げ
馬
の
調
教
見
て
を
り
ぬ

裸木に猫と女とかくれけり

白菜のなかなかなか巻かぬ極楽寺

枯山の戸載せたる安らかさ

母老いて髪を短く冬至風呂

散つてゐし家族の戻る
柚子の風呂

冬の山子どもを隠し
きれざるよ

冬鳥の声の弾けて切通し

ほうと声ありて年木と決まりけり

切通しのこちらへ松を迎へけり

聖護院蕪をふたつ風邪見舞

真中を踏み抜いてゆく焚火跡

白鳥の餌をどんと撒き振り向かず

ぞろぞろと湖を出る鴨草ぬらす

毒草の枯を急がず切通し

ゆるみつつ
つ藤蔓枯れて
みたりけり

見つか
らぬ倉庫
入口日短

北
国
の
日
月
白
し
冬
木
の
芽

な
ほ
高
き
岩
の
冬
日
に
牡
鹿
か
な

冬の運河丸太の髓の積まれたる

手あぶりや灘の真中に日の差して

佐渡へまかると日蓮の文笹子鳴く

雨傘の飛べる軽さよゆりかもめ

海鼠突きみたりし顔のまま笑ふ

海鼠舟大きく回る芯のあり

箱河豚のまだ濡れてゐて転がらず

波音や枯蔓のまたほどけさう

この浦の判官びいきごまめ干す

帆柱の揺れ天上へ年惜しむ

鏡
中
の
船
の
灯
り
し
年
の
暮

海
光
に
濡
れ
た
る
冬
の
大
蘇
鉄

初切符これより旅のはじめかな

年どしの鎌倉参り笹子鳴く

千両も万両もかげる谷戸

雪折の枝をこつたに御所ヶ谷

阿仏尼の声なむ冬菊に屈み

寒天干し暮れゆく山の他は見ず

寒鯉に沈む力の残りを作り

晒しある餅や大根や塞の神

な
や
ら
ひ
の
手
伝
ひ
に
行
く
割
烹
着

が
ん
が
ん
と
朝
日
の
あ
が
る
水
仙
花

浮世絵に影は描かれず水仙花

貝塚の貝の浮き出る四温かな

それぞれの船の位につく雪催ひ

帰心まだ行き渡らざる鴨の群

あとがき

俳句を始めてから現在までずっと海辺の町に暮らしてきた。吟行も海辺が多い。沢山の

海の恵みと共にある俳句である。

私は比較的早く俳句を始めたが、若い頃は欲がなく持続する難しさを痛感した。五十代になってから、再び師にも仲間にも恵まれ感謝している。

最近、パソコンライフを楽しむ中で、何とか句集をまとめたいと思い立った。「俳誌のサロン」の佐藤喜孝氏にお世話になり、このような形で実現できたことは大変嬉しい。

平成十九年五月一日

百瀬七生子

著者略歴

ももせ な お こ
百瀬七生子

1940年生

「杉」を経て、現在「貂」同人
一時「岳」に在籍、S氏賞、前山賞を受賞

俳人協会会員

横浜市在住

俳誌のサロン

句集 海 光

著 者 百瀬七生子

発行日 2007年5月5日

制 作 俳誌のサロン

東京都中野区中央 2-50-3

haisi@haisi.com

